

「菅原道真の生涯」

山居 閑人

菅原の道真の生涯を漢詩と和歌により紹介いたします。

菅原道真は、祖父清公きよきみ、父是善これよしを「文章博士もんじょうはかせ」とする学者の一族の子として八四五年に生まれました。学者の後継者として幼年の頃から厳しい教育を受け、4歳で初めて書を読み、8歳で歴史書を理解し、18歳で大学寮の試験に合格して文章生となり、更に研鑽を続けて33歳の時に「文章博士」となりました。

道真は、11歳の時、初めて「月夜梅花げつやばいかを見る」という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

月耀如晴雪
月耀げつようは晴雪せいせつの如く

梅花似照星
梅花ばいかは照星しょうせいに似たり

可憐金鏡
可憐あわむ可へし金鏡きんきょう転めぐり

庭上玉房馨
庭上りやうじやうに玉房ぎよく香かほれるを

道真は16歳の時、「折楊柳せつようりゅうを賦ふし得たり」という詩を作りました。「賦し得たり」という言葉は、詩題を与えられて作ったことを意味し、「折楊柳」は樂府題がふだいの詩で、楊巨源ようきよげんの詩が有名です。この詩は「折楊柳」という詩題を与えられて作った物ですが、12句（6韻）の排律はいりつであり、科挙の答案を意識した物です。

佳人芳意苦
佳人かじん 芳意ほうい 苦くなり

楊柳先攀折
楊柳ようりゅう 先まず攀折はんせつす

應手麴塵輕

手に応じては 菊塵輕く

候顔青眼潔

顔を候うに 青眼潔し

涙迷枝上露

涙は迷う 枝上の露

粧誤絮中雪

粧いは迷う 絮中の雪粧

織指柔英斷

織き指 柔英を断ち

低眉濃黛刷

低れる眉 濃黛を刷く

葉遮鬢更亂

葉遮りて 鬢 更に乱れ

絲剪腸俱絶

糸剪れて 腸 俱に絶ゆ

若有入羌音

若し羌に入る 音有らば

誰堪行子別

誰か堪ん 行子の別れに

白居易の詩「北窓三友」は成語となっており、琴を弾くこと、酒をたしなむこと、詩を作
ることは教養人のたしなみの一つとされていました。道真も琴を習いましたが、才能が無
く、習うのを断念しました。有名な「秋思の詩」において、「琴を弾き」ではなく「琴を聞
き」とされているのはこのことによる物です。

26歳の時に作られた「弾琴を習うのを留む」を紹介いたします。

偏信琴書学者資

偏に信ず 琴と書とは 学者の資なりと

三餘窓下七条絲

三余の窓下 七条の糸

専心不利徒尋譜

すれど利あらず 徒に譜を尋ぬ

用手多迷數問師

手を用いたれど迷うこと多く 教師はしほしに問う

断峡都無秋水韻

断峡だんきやう都すへて秋水しゆすいの韻ひび無く

寒鳥未有夜啼悲

寒鳥かんう 未だ夜啼やていの悲しみ有らず

知音皆道空消日

知音ちいんは皆道みないう空むなしく日ひを消すと

豈若家風便詠詩

豈あに家風けふの詩しを詠べんずるに便べんあるに若しかめやも

このようにして、道真は文人としての道を歩みました。27歳の時に「八月十五夜月前げつぜんに旧を語る」という詩を作りました。この詩は詩会の席において、韻字をくじ引きで決め、「心」という韻字を得て作られたものです。なお、旧暦八月の十五夜の月を愛でることは杜甫に始まったとされており、白居易の影響により平安貴族の習慣になったものと思われまふ。幼い頃の旧友と再開したときの心境を詠ったものです。

秋月不知有古今

秋月しゆげつは知らず古今ここん有るを

一條光色五更深

一條いちじゆうの光色こうしき 五更ごせい深し

欲談二十餘年事

談かたらんと欲ほす二十餘年の事

珍重當初傾蓋心

珍重ちんじゆうす当初だんしゆの傾蓋けいがいの心を

当時の、朝廷での政治は早朝から行われるのが通例でした。雪の降る中での出勤には、寒さが身にしみ、酒を飲んで体を温めてから出勤することもあったようです。このような、寒さの中での早朝の出勤を、道真は「雪中朝衙ゆきちゆうちやうが」という詩に表しています。紹介致します。

風送宮鐘繞漏聞

風かぜは宮鐘みやかねを送りて 曉漏聞あけのりきこゆ

催行路上雪紛紛

行こうを催もよほす路上りやうじやうに雪紛紛ふんぶんたり

稱身着得裘三尺

身に称かないて着きることを得たり

宜口温來酒二分

裘かむろもさんじやく三尺 口かなに宜ないて温ぬめ來る酒にぶん二分

怪問寒童懷軟絮

怪あやしみて問たずなう 寒童かんどうの軟絮なんじよを懷いだくかと

驚看疲馬蹈浮雲

驚おどきて看みる疲馬ひばの浮雲ふうんを蹈ふむかと

衙頭未有須臾息

衙頭がとう未だ須臾しゆゆも息いこうこと有らず

呵手千廻著案文

呵手かしゆちたび千廻せんかい案文あんぶんを著しるす

ある日、道真は、地方官の決定である除目が行われた翌朝に、右大臣源多の邸宅を訪れました。人事が決定するまでは、請願のために多くの人々が詰めかけましたが、決定した後は、一人一人寂しさでした。道真は「春日 丞相の家門に過ぎる」と言う詩を作り、こんなことでは、お亡くなりになった後では、屋敷は荒れ果てるだろうと、その状況を詠いました。その詩を紹介いたします。

除目明朝丞相家

除目じもくの明わくる朝あさ 丞相じやうしやうが家

無人無馬復無車

人無ひとく馬無うまく復また車無くるまし

況乎一旦薨亡後

況いわんや一旦いつたん薨亡みまかり後のちをや

門下應看枳棘花

門かどの下もと看みるべし 枳棘けいぎの花

学者としての道真は、来朝した外国の使者の接待にも当たりました。渤海国ほっかいこくから来朝した使者の送別会が「鴻臚館こうろかん」で開かれ、そのとき、道真は「夏の夜に、鴻臚館こうろかんにして、北客ほくかくの帰郷ききやうするに餞せんす」という詩を作り、はなむけとしました。別れることの悲しみを匠に表した

詩です。この詩を紹介いたします。

帰歟浪白也山青

帰らん歟 浪白く也山青し

恨不追尋界上亭

恨むらくは界上の亭を 追尋せざることを

腸斷前程相送日

腸は断ゆ 前程に相送る日

眼穿後紀轉來星

眼は穿たる 後紀に転び来る星

征帆欲繫孤雲影

征帆 繫がんとす孤雲の影

客館爭容數日肩

客館 争でか容れん数日の肩

惜別何為遙入夜

惜別 何為れぞ遙かに夜に入る

縁嫌落涙被人聽

落涙 人に聴かるることを嫌うに縁る

道真の提言により遣唐使が廃止されて以後、このように交流の主な相手国は渤海国でした。道真は、来朝した渤海国の裴大使という詩文に優れた人と、特に親しかったようであり、帰国前に肖像画を描かせました。裴大使が帰国した後で、その肖像画を見て「渤海の裴大使が真図を見て感有り」という詩を作り、姿は分かるが、その心までは分からないと詠っています。この詩を紹介いたします。

自送裴公萬里行

裴公が万里の行を送りてより

相思每夜夢難成

相思いて夜毎に 夢成り難たし

真図对我無詩興

真図我に対えども 詩興無し

恨写衣冠不写情

恨らくは衣冠のみ写して情を写さざるを

道真は42歳の時、文章博士の職を解かれ、讃岐守に任ぜられました。左遷とは言えないまでも、学者として生きてきた道真にとっては、この転任は満足の行く物では無かつたようです。任地に赴く途中、「中途にて春を送る」という詩を作り、都を離れることの寂しさ、悲しさを詠いました。この詩を紹介いたします。

春送客行客送春

春は客行を送り 客は春を送る

傷懷四十二年人

懷を傷む 四十二年の人

思家淚落書齋舊

家を思わば涙落つ 書齋は旧たらんかと

在路愁生野草新

路に在らば愁生ずれども 野草は新たなり

花為隨時餘色尽

花は時に随がわんが為に余色尽き

鳥如知意晚啼頻

鳥は意を知るが如く 晚啼頻なり

風光今日東歸去

風光今日東に帰り去る

一兩心情且附陳

一兩の心情 且附し陳べん

讃岐守となった道真は、「寒早し」という十首の詩を作りました。これらの詩は「次韻」

という技法を用いて作られ、全ての詩が、同じ字を韻字として同じ順で使って作られています。それぞれの詩は、下層人民の悲哀を詠った物で、個別のテーマを持っています。そのうちの其の三を紹介いたします。この詩のテーマは、妻を亡くした老人の悲哀です。

何人寒氣早

何人にか寒氣早し

寒早老鰥人

寒は早し老鰥の人に

転枕雙開眼

枕を転がして 双び開く眼

低簷独臥身

簷を低れて、独り臥す身

病萌逾結悶

病萌しては 逾悶えを結び

飢迫誰愁貧

飢迫りては 誰に貧を愁りよう

擁抱偏孤子

擁抱す 偏孤なる子

通宵落涙頻

通宵 落涙頻なり

任地での道真は、都を離れて一人で秋の月を見て、ひととき寂しさを感じ、その心境を「秋天の月」という詩に表しました。この詩を紹介いたします。

千悶消亡千日醉

千悶 消亡す 千日の酔い

百愁安慰百花春

百愁安慰す 百花の春

一生不見三秋月

一生 三秋の月を見ずんば

天下應無腸斷人

天下 応に無かるべし 腸断の人

道真は、43歳の時、休暇として一時的な帰郷を許されました。途中、現在の京都府大崎町である河陽という宿場町に立ち寄ったときに、赴任するときに出会った知人である王氏を訪ねると、その人は死去していました。道真は、その詩を悼んで「河陽の駅に到り感ありて泣く」という詩を作りました。この詩を紹介いたします。

去歳故人王府君

去歳故人王府君と

駅樓執手泣相分

駅樓に手を執り泣きて相分かる

我今到此問亭吏

我今此に到り亭吏に問えば

為報向來一點墳

為に報ず向來一点の墳

一年の後、道真は、再び任地に向かいました。その途中、約八十首の詩を作りましたが、そのうち「駅樓の壁に題す」を紹介いたします。これは、明石の宿場で、宿の楼閣の壁に書き付けられたものです。

春のうららかさが、反って自分の心を痛めること、それを誰も分かってくれない悲しさを詠っています。

離家四日自傷春

家を離れて四日自ら春を傷む

梅柳何因觸処新

梅柳何に因りてか触るる処に新たなる

為問去來行客報

為に問えば去來の行客報う

讚州刺史本詩人

讚州の刺史は本より詩人なりと

讚岐国に帰っても、道真は鬱々とした日を送りました。春も過ぎた日に詩興を催して一人出掛けて詩を吟じても、その心を人々は分かってくれない。この寂しさを「春の日に一人遊ぶ」という詩に表しました。この詩を紹介いたします。

花凋鳥散冷春情

花凋み鳥散じて春情冷じき

詩興催來試出行

詩興催し来りて試みに出でて行く

昏夜不歸高嘯立

昏き夜も帰らずして高く嘯きて立てれば

州民謂我一狂生

州の民は我を謂う一狂生なりと

道真の鬱々とした気持は、冬でも変わることがありませんでした。道真は冬の様々な情景を描写した「冬夜九詠」という九首の詩を作りましたが、そのうち「独り吟ず」を紹介いたします。冬の夜に目覚めて、一人で詩を作る時にも、悲しさはつのるばかりであると言う心境を表しています。

牀寒枕冷到明遲

牀寒く枕冷ややかにして明に到いたること遅し

更起燈前獨詠詩

更に起き燈前に独詩を詠ず

詩興變来為感興

詩興変り来て感興を為すも

關身萬事自然悲

身に関わる万事自然に悲し

続きまして「冬夜九詠」のうちの「殘灯」を紹介いたします。書を読む間に、風が吹き込み、自分も灯火も死にそうになり、必死になって炎をかき立てたが、燃え尽きて折れてしまったということを詠い、悲しみを表しています。

耿耿寒燈夜讀書

耿耿たる寒燈夜に書を読む

煙嵐度牖欲如何

煙嵐の牖を度りて如何んせんと欲す

微心半死頻挑進

微心半ば死にて頻りに挑げ進めば

折盡枯蒿一尺餘

折れ尽くす枯蒿一尺余り

道真は、46歳の時、讃岐守の任を解かれ、中央に復帰しました。その後は、藤原氏を牽制しようとする宇多天皇の意により、目覚ましい出世を遂げるようになります。翌年、

蔵人頭に任ぜられ、49歳で参議となり公卿の一員となりました。さらには、その2年半後には、権中納言に任ぜられ、更にその2年後には権大納言となり、55歳で遂に右大臣となりました。この間、皇室との婚姻関係も進めましたが、当時の中心勢力であった藤原氏の政敵となることになりました。

この時代、道真は、色々な宴会に招かれて多くの詩歌を作りました、これらを順次紹介していきたいと思います。

道真47歳頃に、宮中で花見の宴が行われました。醍醐天皇の命により「桜花」という題で一同が詩を作ることになり、道真は「春夜の桜花を賦して制に応ず」という題の詩を作りました。「制に応ず」ということから、天皇の命により作ったことが分かります。桜の花の美しさを見事に表現したもので、京に帰った道真が、生き場所を得た心持ちであったことが偲べれます。

江櫻一種意疎
江櫻一種意疎きこと無し

向曉猶言夜未渠
暁に向いて猶言う夜未だ渠からずと

香倍移於仙砌後
香は倍す仙砌に移りて後

色添隱在故山初
色は添う隠れて故山に在りての初

通風鳳女粧相似
風通ては鳳女の粧に相似たり

迎月龍花樹不如
月を迎えては龍花の樹も如かず

多少春情誰為惜
多少の春情誰が為にか惜しまん

九重深處萬機餘
九重深き処万機の余

道真は、当時皇太子であった醍醐天皇から二時間のうちに十首の七言絶句を作るように言

われ、それぞれの詩題を与えられて応令詩を作りました。そのうちの「春を送る」を紹介い

たします。去りゆく春は、もし自分の惜しむ心を分かってくれたら、一家の宿を自分の家とするだろうと詠っています。

送春不用動舟車

春を送るに舟車を動かすことを用いず

唯別殘鶯與落花

唯だ殘鶯と落花とに別る

若使韶光知我意

若し韶光をして我が意を知らしめなば

今宵旅宿在詩家

今宵の旅宿は詩の家に在らまし

続きまして、道真が当時皇太子であった醍醐天皇の御殿の薔薇を詠った「殿前の薔薇に感ず」を紹介致します。薔薇は、他の花と同時に咲き、その美しさを競い合うようなことはいない、一目見た人を虜にすると詠っています。

相遭因縁得立身

因縁に相い遭いて身を立つるを得たり

花開不競百科春

花開いて競わず百科の春

薔薇汝是應妖鬼

薔薇 汝 是 応に妖鬼なるべし

適有看來惱殺人

適 看來たる有らば 人を惱殺す

道真は、宇多天皇の皇子の邸宅に於いて行われた宴会において、「殘菊に対して寒月を待つ」という詩を作りました。この詩を紹介致します。

菊は枯れて月は欠け始めた。このような情景を見ると、無風流な者でも悲しみを抑えられないであろう。詩人に於いてはなおさらであると詠っています。

月初破却菊纒殘

月初めて破却し 菊纒に残る

漁夫樵夫抑意難

漁夫樵夫 意抑え難し

況復詩人非俗物

況や復 詩人の俗物に非ざるをや

夜深年暮泣相看

夜深く年暮れて泣いて 相看る

道真は、詩会ばかりで無く、歌合わせにも出席しました。宇多天皇の時代に「菊」という

題での歌合わせの和歌が古今集に採録されております。吹上の浜をかたどった州浜に植えられた白菊を波かで見立てたものです。この和歌を紹介致します。

秋風の吹き上げにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

また、道真が、宇多上皇の吉野宮滝御幸に従駕したときの和歌が、古今集に採録されて

おります。この和歌は、「百人一首」にも採録されました。御幸は、急に決められたものであったのでしょうか。

このたびは幣もとりあへず手向山もみぢの錦神のまにまに

このとき、宇多上皇は、宮の滝という所を御覧になりました。道真は、流れ落ちる滝の水を白糸に見立てて和歌を詠みました。後撰集に採録されているこの和歌を紹介致します。

水ひきの白糸はへて織る機は旅の衣にたちやかさねむ

このようにして、道長が右大臣になったときに、「重陽の節句」の翌日に行われる「後朝の宴」において、宇多天皇から一同に「秋思」という題で詩を作るようにお言葉がありました。

した。道真は「九日後朝、同に秋思いを賦して制に応ず」という詩を作りました。有名な「秋思の詩」です。この詩の詩の中には、白楽天の「長恨歌」「北窓三友」「吳桜桃」の三首が引用され、「独り断腸」の詩で、とりわけ勝れた物として、醍醐天皇から衣を授かりました。「秋思の詩」を紹介致します。

丞相度年幾樂思
丞相年を度りて幾たびか樂思す

今宵觸物自然悲
今宵物に觸れて自然に悲し

聲寒絡緯風吹処
声は寒し絡緯風吹くの処

葉落梧桐雨打時
葉は落つ梧桐雨打つの時

君富春秋臣漸老
君は春秋に富み臣は漸く老ゆ

恩無涯岸報猶遲
恩は涯岸無く報ゆること猶遅し

不知此意何安慰
知らず此の意何か安慰せん

飲酒聽琴又詠詩
酒を飲み琴を聴き又詩を詠ぜん

このようにして、栄達を重ねた道真でしたが、一方で藤原氏にとって邪魔者となりました。

こんな中で、宇多天皇は位を醍醐天皇に譲りました。左大臣藤原時平を首謀者とする藤原

氏は、この機会を見逃さず、道真に謀反の心があると讒言し、醍醐天皇はこれを信じて、

道真を太宰権師に左遷しました。政務には関与するべからずとされ、事実上流刑でした。

儒者としての道真にとって、天皇の命令は絶対で有り、また、味方となる勢力もありませんでした。僅かに、宇多上皇を頼りとし、和歌を送って助けを求めました。この和歌を紹介致します。

流れゆくわれはみくづとなりはてぬ君しがらみになりてとどめよ

道真の和歌を見た宇多上皇は、早速、醍醐天皇に面会を求めて参内しましたが、藤原氏に力尽くで止められて面会することはできませんでした。このようにして、道真は太宰府に送られることになり、家を離れる際に、梅の木を見て和歌を詠みました。この有名な和歌を紹介致します。この和歌を聞いた梅の木が、後ほど、道真のいる太宰府へ、一夜のうちに飛んでいったという「飛び梅」伝説を生みました。

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ

太宰府に向かう途中、明石の宿場に宿ったとき、驚いている宿場の長に、詩を作って与えました。「花は咲いても秋には枯れる」と悟った気持を詠った物です。「一栄一落」は成語と成っており、一方、道真は、前途への不安を和歌に詠みました。これらから、道真の気持ちは複雑であったことが推察されます。これらの詩と和歌を紹介いたします。

駅長莫驚時變改 駅長驚く勿れ、時の變改するを

一栄一落是春秋 一栄一落は是れ春秋

天つ星道も宿りもありながら空にうきても思ほゆるかな

旅の途中、道真は、今たどってきた道を振り返り、和歌を妻に送りました。拾遺集に採録されているこの和歌を紹介いたします。

君がすむ宿のこずゑのゆくゆくと隠るるまでにかへりみしやは

太宰府に着いてから間もなく、道真は「自詠」という詩を作りました。この詩を紹介致します。

離家三四月 家を離れて三四月

涙落百千行 落つる涙は百千行

万事皆如夢

万事皆夢の如し

時時仰彼蒼

時々彼の蒼を仰ぐ

太宰府では、道真は身柄を拘束されるようなことはありませんでしたが、勅命を賢んで謹慎生活を送りました。その心境を「門を出でず」という詩に表しております。ひたすら謹慎した心境で有り、敢えて外出することもないことを述べております。この詩を紹介致します。

一從謫落在柴荊

一從謫落せられて 柴荊に就きしより

万死兢兢跼蹐情

万死兢兢たり 跼蹐の情

都府桜纒看瓦色

都府桜は纒かに 瓦色を看

観音寺只聴鐘聲

観音寺は只 鐘声を聴く

中懷好逐孤雲去

中懷好し孤雲を逐いて去り

外物相逢滿月迎

外物相逢いて 満月迎こう

此地雖身無檢繫

此地の身 檢繫無しと雖も

何為寸步出門行

何為れぞ 寸歩も門を出でて行かん

太宰府に於いて、北から飛んできた雁を見るに付けても、道真には、自分と対比して、来春には変えることが出来る雁がうらやましく見えました。そして、このことを「雁を聞く」という詩に詠いました。この詩を紹介致します。

我爲遷客汝來賓

我は遷客為り 汝は来賓

共是蕭蕭旅漂身

共に是れ蕭蕭として 旅漂の身

敬枕思量歸去日

枕を敬そはだてて思量しりようす 歸去ききよの日

我知何歳汝明春

我しは知しんぬ何いずれの歳なれぞ 汝みは明み春しゆん

また、道真がこの時読んだと思われる和歌が続後撰集ぞくごせんしゅうに採録されております。この和歌を紹介致します。

雁がねの秋なくことはことわりぞかへる春さへ何かかなしき

流罪となつてから、一年近くが経過し、あの「秋思の詩」を作った九月十日がやってきました。道真は、その時のことを思い出し、褒美として賜った衣を毎日捧げ持って、炊き込められた香の香りを味わい、宇多上皇の恩を偲ぶことを詠いました。この詩「九月十日」を紹介致します。

去年今夜待清涼

去年せうねの今夜せいりよう 清涼せいりように待まちす

秋思詩篇獨斷腸

秋思しゅうしの詩篇しへん 独ひとり断腸だんちよう

恩賜御衣今在此

恩賜おんしの御衣ぎらい 今いま此こに在あり

捧持毎日拜餘香

捧持ほうじして 毎日まいにち余香よこうを拝ひらす

道真は、又、曾て宇多天皇の寵愛に預かっていたころを懐かしむ和歌を作っております。新古今集に採録されたこの和歌を紹介致します。

道の辺の朽ち木の柳春くればあはれ昔と偲ばれぞする

「九月十日」を作った月の十五夜の日、道真は月を見ながら「秋夜しゅうや」という詩を作りました。「秋思の詩」と並ぶ有名な詩です。迫り来る老いの中で、自分の無実の罪を晴らすことが出来ない無念さと悲しさを見事に表した詩です。「秋夜」を紹介致します。

黄萎顔色白霜頭

黄萎の顔色 白霜の頭

況復千餘里外投

況や復 千余里外に投ぜられしをや

昔被栄花簪組縛

昔は栄花 簪組に縛せられ

今為貶謫草萊囚

今は貶謫 草萊の囚と為なる

月光似鏡無明罪

月光は鏡に似るも 罪を明らかにすること無なく

風氣如刀不破愁

風氣は刀の如くしてを破らず

随見随聞皆惨慄

見るに随がい聞くに随がい

此秋独作獨身秋

惨慄 此の秋 独り我が身の秋と作る

また、道真は、このころの嘆きを和歌に詠んだことが『大鏡』に記載されており。野山に立つ煙が、自分の嘆きという「木」を滝添えることで更に燃えまさと詠っています。また、新古今集には、自分が無実であることを月だけが知っていてくれるとした和歌が新古今集に採録されております。これらの和歌を紹介致します。

夕されば野にも山にも立つけぶり歎きよりこそ燃えまさりけれ

海ならずたたへる水の底までいきよき心は月ぞてらさむ

学者である道真は、太宰府に於いても読書が続けようとはしましたが、夜に書を読むために必要な灯火の油が十分でなく、読書の間には灯が消えることがありました。道真は、このことを「灯消ゆ」という2首の絶句に詠いました。これらを紹介致します。

脂膏先盡不因風

脂膏の先ず尽くるは 風に因らず

殊恨光無一夜通

殊に恨む 光の一夜通すこと無きを

難得灰心兼晦跡

得難し 灰心と跡晦と

寒窓起就月明中

寒窓に起きて就く 月明の中

秋天未雪地無螢

秋天に雪あらず 地に螢無し

燈滅拋書淚暗零

燈滅え 書を抛たば 涙 暗に零つ

遷客悲愁陰夜倍

遷客の悲愁は陰夜に倍し

冥冥理欲訴冥冥

冥々の理は冥々に訴えんと欲す

道真は、秋の月を擬人化し、月に対して問う詩と、月に代わって問に答える詩を作りました。最初に「秋月に問う」を紹介します。これは、形を変えるがその本質を失わないのに、雲に蔽われて西に流されていく月と自分の姿を対比したものです。

度春度夏只今秋

春を度り夏を度り 只今は秋なり

如鏡如環本是鉤

鏡の如く環の如く 本は是れ鉤なり

為問未曾失終始

為に問う 曾て終始を失わざるに

被浮雲掩向西流

浮雲に掩われて 西に向かいて流るるか

つづいて「月に代わりて答う」を紹介致します。月は言います。「天はやがて私を蔽っている雲を払いのけてくれるであろう、私は、ただ、西に向かつて流れるように見えるだけで、左遷された訳では無いのだ。」と。天の月と人間世界にある道真とは、運命が違っていないのです。

莫發桂香半且圓

莫は發き 桂は香り 半円ならんとす

三千世界一周天

三千世界 天を一周す

天廻玄鑑雲將霽

天は玄鑑を廻して 雲將に霽んとす

唯是西行不左遷

唯是れ西に行くのみ左遷にあらす

これらの詩に対応すると思われる和歌が、新古今集に採録されております。この和歌を紹介致します。

月ごとにながると思ひしますかがみ西の海にもとまらざりけり

太宰府に流されてから二年が経過し、道真は自分を蘇武や燕の丹にの故事にならぞえ、京へ帰りたいと言う思いを込めた「謫居の春雪」という詩を作りました。この詩が道真の最後の作と考えられます。京に帰りたいという願いも空しく、道真は903年2月25日に、59歳の生涯を閉じました。「謫居の春雪」の吟詠を紹介致します。この吟詠を最後に、「菅原道真の生涯」の紹介を終わらせて戴きたいと思致します。

盈城溢郭幾梅花

城に盈ち郭に溢るは 幾の梅花ぞ

猶是風光早歲華

猶是れ 風光 早歳の華なり

雁足粘將疑繫帛

雁の足に粘將しては 帛を繫たるかと疑い

烏頭點著憶帰家

烏の頭に点著つきては 家に帰らんと憶う

(令和2年9月23日作成)

参考文献等

『菅原道真（日本漢詩人選集1）』富士川英郎・入矢義高・入谷仙介・佐野正巳編。研文

出版発行。

ブログ「菅原道真千人万首」

<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/mitizane.html>